



飯田 郷介

建築家

中札内美術村副館長
日本建築美術工芸協会個人会員

「美味しい美術館の美味しいところ

——建築の保存を考える」

「美味しい美術館」についての講演ご依頼をいただきましたが、協会の皆様には「美味しい美術館」を読んでいた方が大勢いらっしゃると思いますので、今回は未発表の原稿の中から「三菱一号館美術館」を選びました。また「三菱一号館美術館」は再生した建物です。ですので「建築の保存」をサブテーマに組み立てました。

「北海道の自然を保存・再生させたミュージアム」

まずは、私が企画・設計・プロデュースを長年手がけてきました美術館を紹介しました。1992年に開館しました「中札内美術村」は当初工場建設用地として広大な柏林を購入し、美術館づくりからスタートしましたが、柏の木を切ってまで工場は造らないと、柏林は保存されました。そして新たに工場用地として購入した草木の生えていなかった荒地を10年の歳月をかけて自然を再生し、山野草の中に建築100年以上のクロアチアの民家を移築した「坂本直行記念館」などの美術館群が点在する「六花の森」が誕生しました。

「岩崎彌之助がつくった丸の内オフィス街」

三菱一号館美術館を書こうと思ったのは、120年前の建築を当時のままに復元させた大偉業と丸の内オフィス街をつくった岩崎彌之助をもっと多くの方々に知っていただきたいからです。三菱を創業した岩崎彌太郎は、歴史の表舞台で活躍しましたが、弟の彌之助は、現在の三菱グループを創り育てた二代目の社長です。皇居を守るために丸の内周辺に配置されていた陸軍の用地が売却されることになり、彌之助は丸の内・有楽町地区、三崎町地区あわせて10万7千坪の全地を当時の東京市の予算の三倍と言われる金額で、しかも三菱一社で購入し、世間だけではなく、三菱社内も驚かせました。そして早速丸の内地区の街づくりに着手しました。ロンドンの街並みを目指した彌之助は、土地



三菱一号館美術館

を切り売りはせず、三菱が設計した貸事務所により一丁ロンドンと言われた赤レンガづくりの美しい街並みをつくりあげました。

「日本近代建築の父と謳われたコンドル」

丸の内に最初に建てられた三菱一号館は英国ヴィクトリア時代のアン女王様式と言われ、簡素な赤レンガで軽快・繊細なデザインとなっています。この建物を設計したジョサイヤ・コンドル (1852~1920) は、ロンドンで建築を学び、明治政府の要請に応じ、1877年来日、25歳の若さで工部大学造家学科主任教授となりましたが、ロマン主義の様式の典型であるゴシック様式を日本にもたらし、在任中初めて西欧の建築教育体制を日本に移植し、多くの建築家を養成し、現代日本建築界の基礎を築きました。コンドルの作品の中から、コンドルが薔薇庭園設計も手がけた古河虎之助邸 (北区西ヶ原)、コンドル晩年の代表作三井倶楽部 (港区三田)、岩崎久彌邸 (文京区湯島)、岩崎彌之助高輪別邸 (現・開東閣、港区高輪) などをご紹介します。

三菱一号館は明治27年 (1894) に完成しましたが、その建設中の明治25年に丸の内に美術館の計画があったのも驚きです。「文化の街づくり」の中心施設としてコンドル設計の設計図は残っていますが、残念ながら実現しませんでした。しかしこの企業メセナの想いが今回の美術館づくりにつながったと思います。

「味どころ“オリエント・カフェ”」

「美味しい美術館」は、「見どころ」、「魅どころ」、「味どころ」、「散策のヒント」の4部で構成していますが「味どころ」は、丸の内から少し離れるのですが「オリエント・カフェ」(文京区本駒込) を紹介しました。このレストランは東洋文庫に併設されています。東洋文庫は三菱第三代当主岩崎久彌が1924年に設立した“世界屈指の東洋学専門図書館”と言われ、柱となる所蔵は「モリソン」文庫です。ロンドンタイムズ社北京駐在の特派員であったウィリアム・モリソンが20年にわたり心血を注いで蒐集した極東に関する欧米文献約2万4千冊を久彌が現在の貨幣価値約70億円で購入したことに始まります。またモリソンは「日露戦争を演出した男」として知られ、中国に進出してきたロシアからイギリスの利権を守るため6年以上にわたる活動により日本は戦争に突入したという歴史も秘められています。オリエント・カフェのお奨めは文庫ランチ「マリーアントワネット」で1日10食限定のランチは開店とほぼ同時に売り切れとなります。「散策の



ヒント」では、コンドルが設計した岩崎彌之助邸がある静嘉堂文庫美術館 (世田谷区岡本) を紹介しました。

最後に本講演にあたり、写真・資料をご提供いただいた三菱一号館美術館の皆様にご感謝申し上げます。